

「かんぱい」

合わせたグラスが小さく音を立てる。ひとくち口に含んで飲み込めば、ミネラルウォーターの炭酸が微かに喉を刺激する。

「この店、あんたが好きそうだなと思って連れて来たかったんだよね。ほら、この辺のやつ、あんた好きじゃない？ 好きなの頼んでよ」そう言ってメニューに指をさすと、彼女は頷きながら嬉しそうにメニューを選び始めた。

「てか、まさか、あんたに彼氏ができるとは思わなかつたな。そういうの、全然興味なさそうだったじゃん」

平静を装って笑いながら彼女に言う。すると、彼女は照れる様子もなく説明してくれた。

カメラマンのあいつから試しに付き合ってみない？ と言われ、悩んでいたら周囲の人たちに付き合ってみればいいと勧められたのだと。仕事の仲間内でもあいつの好感度は高いらしく、それなら……と久しぶりに恋愛をしてみる気になったそうだ。

その相手がなんで俺じゃないのか。なんで俺を選ばないのか。

彼女の鈍感さに苛立つ。けれど、それを表には出さずに俺は話を続けた。

「ふーん、そっか……まあ、あのカメラマン確かに良い人って感じだよな。面白味も何もなさそうな奴だけど」

最後の言葉は彼女に聞こえないように呟く。

あいつとは今日の撮影で一緒だった。カメラマンとしての腕は及第点。社交的で容姿はそこそこ。可もなく不可もなく無害そうな男。俺の嫌いなタイプだ。人を信じて疑わないような人柄も鼻につく。

何気なく彼女とのことを聞けば、タイミングがよかつたみたいで付き合うことができたと嬉しそうに答えた。

腸が煮え返りそうだった。そのあとも俺に彼女とうまく付き合っていくアドバイスが欲しいと話しかけてきた。

やっぱり訂正する、大嫌いなタイプだ。

ああいう奴は一度怒らせてみるといいんだ。きっと面白くなる。

とはいえる、あいつには彼女とこうして会うことを言っていない。最初から言うつもりもなかった。

だから、彼女との時間を邪魔されないように適当に根回しをした。
あいつにとっては悪い話じゃない。潰されないだけありがたいと思って欲しいくらいだ。

彼女にはもちろん聞こえていなかったようで、彼女は気にすることもなく店員を呼んで注文をする。

「でもさ、周りの人に勧められたから付き合うとか、あんたらしくないよ。ちょっとがっかりだな」

少しだけ呆れたように言ってみると、期待外れでごめんと彼女は笑う。

「別に謝って欲しいわけじゃないんだけど。あんたはもっと自分を持っている人だと思ってたから」

彼女と出会ったときのことを思い出す。

俺をまっすぐ見て正面からぶつかってきた彼女。俺に文句を言われても逃げずに向き合ってくる彼女。俺ができて当たり前のことを当たり前と言わない彼女。

そして、一緒に過ごしていく中で、俺は俺のままでいていいと言ってくれた彼女。

俺の欠けている部分を補うように彼女は俺の隙間に入り込んできた。

出ていってくれるな。変わってくれるな。頼むから、そのままのあんたでいてよ。

じゃないと、俺はあんたに酷いことをする。俺は、あんたを失ってしまうことが何よりも怖い。

彼女は俺の言葉を聞いてぽつりとこぼした。

最近一人でいると寂しくなるときがあって弱くなったのかも、と。

「ねえ、だから、なんで俺じゃないの？寂しいって、俺がずっとそばにいたじゃん」

そう言いたいのをぐっと飲み込んだ。

きっと彼女には伝わらない。また冗談だと躊躇されるくらいなら、もう何も言わない。

本気だとわかってもらうために他の女を全部切って、彼女のペースに合わせて、彼女だけに気持ちを伝えてきたつもりだ。

けれど、俺なりに頑張ってしてきたこと、彼女のためだと思ってしてきたこと、その全てが無駄だったんだから。

こんなことになるなら、もっと早く行動に起こしていればよかった。

本来、俺はすぐに答えが欲しいタイプで遠回しな言い方もやり方も嫌いだ。

でも、彼女だったから。彼女が好きだったから。彼女を大事にしたかったから。

俺を好きになって欲しかった。俺だけに笑いかけて欲しかった。俺の全てを受け入れて欲しかった。

「……このままじゃ、もう無理なんだよな」

その呟きに彼女が今度は反応した。とても心配そうな顔で俺を見ている。

そして、俺の相談したいことが何なのかと聞いてくる。それで悩んでいると思ったらしい。

あんなの彼女を誘い出すための出まかせに決まってるのに。

自分がこれからどうなるかも知らずに、俺の心配をする彼女を可哀想だと思った。

「俺の相談はあとからでいいよ。まずはあんたのお祝いをしないと」
でも……と彼女が俺の様子を窺う。

「ちょっと面倒な話なんだよね。長くなりそうだし、それに俺も心の準備がいるから」

適当に答えると、そんなに深刻なのかと彼女はさらに心配そうな顔をする。

もういいから。俺に優しくしないでよ。

「それよりもさ、あんたは自分の心配した方がいいんじゃない？ せっかく彼氏ができたのに仕事忙しいんでしょ？ あんた、今まで通りだと仕事に夢中で即効フラれそうなんだけど」

いつもの調子で俺がそう言うと、そうなったら縁がなかったと思って諦めると彼女は言った。

「それって、彼氏のことを？ それとも、恋愛 자체を？」

恋愛を、と彼女は悩むことなく答えた。

あいつのことがまだそんなに好きじゃないってこと？ 恋愛するならあいつしかもう考えられないってこと？

ねえ、どっち？ 教えてよ。なんでそこに俺はいないの。ねえ、なんで？ なんでなんだよ。

「へえ、そうなんだ。なら、これが最後の恋愛ってやつ？ あはっ、なんかかっこいいじゃん。じゃあ、なおさら頑張んないとね」

思ってもいないことを口にして吐き気がする。

こっちの気も知らないで、なるようにしかならないけど頑張ると彼女は言った。

頑張んなくていいよ。だって、あんたに選択肢なんてもうないんだから。

あんたは俺のものになるしかないんだよ。これから、あんたは俺だけの世界で生きていくんだよ。

たとえ、あんたが壊れても、愛してくれなくとも、最後まで俺がずっと一緒にいるから。

そう決めたばかりなのに、彼女が言葉を紡ぐ。

俺というときがやっぱり一番楽、安心する、と笑って。

ねえ、もう戻れないんだよ。

だから、ごめんね。

化粧室に行くと席を立った彼女の後ろ姿を見送って、俺は彼女の飲みか

けのグラスに薬を入れる。

音とともに泡を立てて溶けていくそれを、俺は見つめた。